教祖ご在世時代

天理大学附属天理図書館
天理教文献室
早田　一郎　*Ichiro Soda*

教祖のご在世中はどんな伝道がなされ、どこまで広まったのであろう。残された資料は少ないが考えてみよう。

手がかりに『稿本天理教教祖伝』の記載を拠り所に考える。立教時、教祖の口から出た言葉は「世界一れつを救けたい」であった。そして「貧に落ち切れ」との親神の思召に従い「元の神・実の神」の意味を明かされることになるが、真実の教えは誰にも理解されない時代が20年以上続いた。

江戸時代を通じて一般民衆が触れていた信仰は仏教、神社神道、民間信仰である。しかも自分で宗教を選択できることもなく、代々受け継いだ宗教・宗派だった。このような時に「世界一れつを救けたい」という親神の思いを受け入れる土壌はなく、理解されないのは当然であった。

施しを受けた人たちは教祖の慈悲に慕い寄った。しかし、真実の神を理解できるはずはなく、信仰を始めた訳でもなかった。

教祖は貧のどん底にあるとき、親神の思召のまにまに数年間、お針の師匠をなされたという。また、長男秀司も村の子どもたちに読み書きを教えた。習いに来る子らの家人は真実の神は分からなくとも親しみを感じていたであろう。

嘉永６年（1853)、こかんは教祖の命を受け浪速の町で神名を流した。こかんは教祖以外で、初めて伝道という明確な行為をした人と言える。

教祖三女おはると中山家の近くに住む清水ゆきへの「をびや許し」のいきさつを見た人たちが教祖の不思議な力に接し、次第にをびや許しを頂きに来る人が増える。明らかな効能を見せられると助けを求めるのは人の常であろう。教祖の神的な力に魅せられたのであり、これが「よろずたすけの道あけ」となった。

安産の守護を頂いた人々は「庄屋敷村には安産の神様が御座るそうな、生神様やそうな。」と噂してまわった。

このことは教祖の伝道方法を如実に表している。すなわち、教祖はおたすけに自ら積極的に出向かれたことはあまりない。教祖の力や魅力が人の噂話として広がり、「にをいがけ」の言葉通り、良質の匂いが発せられ、人が吸い寄せられるように集まった。教祖はおやしきに居ながらにしてにをいがけされたのである。

一方、数少ないが教祖がおたすけに出かけられたことがある。『稿本天理教教祖伝』に見えるのは、安堵村飯田家、大豆越村山中家、河内国教興寺村松村家、若井村松尾家の４カ所で、平等寺村小東家へも秀司結婚の件で出かけられている。

４軒の家では家人を助け、教えを説かれそれぞれ滞在された数日間に近くの人々が助けを求めて集まった。これも先方から教祖の匂いに吸い寄せられたものだと言える。

幕末の元治には芝、大豆越、小路、大西、新泉、龍田、安堵、並松、櫟本、古市、七條、豊田の各村からおやしきへ帰る人がいたという。また、慶応２年（1866）には芝村藩、高取藩ほかの武士が参詣に来ている。おやしきはほんの少し前と比べ随分賑やかになった。教祖の噂がかなり広範囲に広がった結果であろう。

慶応３年の『御神前明記帳』の記載について考えてみよう。『御神前明記帳』は慶応３年４月５日から同５月10日にわたる36日間のおやしきへの参詣者記録である。この間述べ2,175人もの人が参詣に訪れた。１日平均60人である。

参詣者を現在の地域名で分けると奈良県が2,134人で全体の98％強、大阪府と京都府がそれぞれ15人、各0.7パーセントである（その他と不明が11人)。奈良県（大和国）ではおやしき近辺と磯城郡、生駒郡、大和郡山などが多い。距離が遠くなるほど参詣人は少ないが、それでも吉野郡の人もみえ、大和全域に教祖の噂が広まっていたと考えられる。

『御神前明記帳』に記名ある人たちは教祖の噂に引き寄せられた人たちではあったが、後々まで信仰を続けた人は僅かで当時の信仰程度が窺える。

明治３、４、５年と本教は河内、摂津、山城、伊賀にと弘まった。河内で最も早い信仰者は教興寺村の松村家であろう（注:『御神前名記帳』によると、教祖の噂を聞き、おやしきにやってきた人は他にもいるが、その場限りの参詣者であろう)。

明治２年に教祖長男秀司と結婚した小東まつゑの姉さくが松村家に嫁いでいた。さくの身上の患いをきっかけに松村家も信仰を始める。明治４年正月の話である。

その後、柏原村の山本利八、利三郎父子が明治６年に信仰を始め、続いて大県村の増井りんも信仰する。大和からさほど大きくない山を越えれば河内である。自然な成り行きで教祖の噂が広がり河内一帯に信仰者が誕生する。

現在の大阪市内、浪速と呼ばれた地域はおやしきから見れば河内より遠い。にもかかわらず最初の信仰者が出るのは江戸時代の末期、慶応元年で河内のどの信仰者より早い。現大阪市住之江区に安立というところがある。その安立に慶応期「種市」という種を売って歩く商人の夫婦がいた。名前は前田藤助とタツという。夫婦にはすでに子どもがいたので、妊娠したタツは堕胎しようと効験あらたかな神様を捜し歩くうち、教祖の噂を聞きおやしきへ参詣した。教祖のお話を聞いて堕胎をせず安産した。教祖から守護頂いたことを伝えて歩くよう教えられ、種を売りながら浪速の町で神様の話を伝え歩いたという。

前田夫妻からにをいをかけられた人に現大阪市西区本田の井筒梅次郎と大正区木津川河口三軒家の博多市次郎がいる。井筒と博多の信仰は芦津大教会、西大教会、撫養大教会ほか数多くの大教会、分教会の元となる。

河内に広まった信仰はやがて西へ、大阪の町へ入り、明治10年頃には天恵組という講が発展する。組はさらに１番から６番くらいまでに分かれていたようだ。その中、泉田籐吉の４番が発展する。

泉田籐吉は入信前、西国回りの強力などをしていたが、胃がんを助けられてからは「かしもの・かりものの理」を聞き分け、蒸し芋屋をしながらおたすけをしていたという。急なおたすけの時、蒸し芋屋の道具一切を道ばたに置いたまま駆けつけるという熱心家だった。泉田籐吉のおたすけで入信した人に小松駒吉（御津大教会)、茨木基敬（北大教会)、中西金次郎（大江大教会)、寺田半兵衛（網島分教会）らがいる。

その他、教祖ご在世中の伝道について述べなければならないことは、徳島県撫養町に伝わったこと、京都の明誠社、斯道会のこと、静岡や東京への伝道などがある。これらは次回以降、当該地域の伝道を述べる時に触れることとする。